

巻頭言

世界がCOVID-19によって変容している。日本惑星科学会はどうだろうか？テレワークが広がり、大学授業はオンライン講義となり、学会はリモート開催になった。これを一過性とは考えず、人々は不可逆な変革の始まりだと感じている。感染拡大の終息後もネットの活用で地理的な距離が克服され、研究活動も確実に影響を受けるだろう。仕事のために家族やパートナーと離れて暮らす必要は減るし、留学せずとも海外大学の講義を受けられるようになる。外国人ボスドクの受け入れも容易になる。性別や国籍の優位性が均されれば国際化が進み、研究の質が向上するだろう。研究者同士の競争が激化すると同時に、研究活動の多様性が増えていくのではないか。

日本惑星科学会は冷静に今後の世界に目を向けるべきだ。惑星探査では中国が台頭し、米国、欧州とともにトップ3を形成している。他方で、UAEや韓国、イスラエルが宇宙開発に参加して、多極化が進んでいる。日本はかつて米ソ、米欧につぐ「第3の宇宙開発国」を目指して奮闘努力を続けてきたが、現状ではロシアやインドとともに第2集団にいる。アルテミス計画は多極化を加速させるとともに、産業振興、安全保障という観点で科学に求められる価値を大きく変えていく。世界の変容とともに惑星科学の意義すら変わっていくことを私達は認める必要がある。

世界が変わっても研究者はなかなか変わらない。学術会議は内閣府の圧力に抵抗し、「日本惑星科学会を壊す」と学会長が宣言しても(中本、遊星人2019年1号巻頭言)簡単には壊れそうにない。変わっていく世の中に、「人類の発展に貢献する知識を発見する」という目的を決して譲らない科学者の頑固さは、それはそれで希少価値がある。変わる世界への適応と変えない信念の一徹さを両立させるコミュニティが生き残って行くのだろうか。

科学を広い視野で観察していれば、学問の境界領域に新しい分野が生まれるはずだ。天文学の分野では系外惑星の観測が盛んに行われるようになって、太陽系内の惑星の観測との関連に興味が集まっている。太陽惑星圏分野とは惑星探査において協力が必須となり、共同作業が求められている。工学分野とは「はやぶさ」以来密接な協力関係にある。変わっていく世界にはチャンスがある。どうせこの先学会設立のメンバーたちは徐々に引退していく。今なら新しい世界にふさわしい新しい惑星科学コミュニティが誕生できるのではないか。

竝木 則行 (自然科学研究機構 国立天文台/総合研究大学院大学 物理科学研究科)